2019 年度　学校評価報告書

（自己評価・授業評価・学校関係者評価及び次年度方針）

2019 年 3 月 31 日
大阪信愛学院中学校・高等学校
学校評価委員会

はじめに

学校教育法及び同施行規則に基づき、本校において学校評価を実施するため、２０１９年１１月に本校の教員、１２月に保護者に「学校評価アンケート」を実施した。また、生徒には１２月に「授業評価アンケート」を配布し、結果を集約した。同時に中学校高等学校の保護者の代表役員、卒業生の代表役員、卒業生保護者の代表役員に学校関係者評価を実施していただいた。この文書は学校評価委員会が分析したものである。

本校の設立母体は、フランスに本部のある「ショファイユの幼きイエズス修道会」である。系列校は日本に４校ありますが、系列校の中で保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校そして短期大学を併設しているのは本校のみである。系列校の基本であるキリスト教的価値観に基づき、自分と他者を大切に、かけがえのない生命の尊さを体現し、隣人愛ゆえの国際教育、与えられたタレントを磨くための女性のリーダーシップを目指している。

今回の学校評価は本校の現状及び課題を再認識する契機として位置づけ、伝統の上にたった変革を成し遂げるための有効な検証の手段としてとらえている。

１．建学の精神

「キリストに信頼し、愛の実践に生きる」

１８７７年（明治１０年)、フランスから派遣された４人のシスターたちは町の中に捨て子たちを養育することから始めた。それは「隣人を自分のように愛しなさい」というキリスト教的精神の表れある。その精神に従い、弱い者、困っている者、傷ついている者に手を差し伸べるという行為を実践した。

１８８４年（明治１７年)、大阪の川口居留地に最初の女学校が創立された。信愛に学ぶ生徒たちが建学の精神を体現し、社会に貢献することを目指す。

２．教育目標

（１）キリスト教的価値観に基づく教育

人間はかけがえのない存在として造られ、自分の命と他者の命の尊厳を意識し、また与えられたタレントを最大限に磨き、誇りを持って自分の人生を築くよう促す。日々の朝礼のお祈り、黙想、聖書の授業、また地域社会との連携と奉仕、募金等を通して困っている人、弱い立場に置かれている人を意識することを学ぶ。

（２）一人ひとりが輝く教育

生徒が個性と主体性を尊重し、自分で考え、判断し、行動する力を育てすべての人に対して差別や偏見を持つことなく公平、公正にして、正義とゆるしの実践的態度を養う。

（３）能力の開発を目指す教育

絶えず自分の限界を越えて勉学し、知性の向上はもちろん、直観力、想像力、創造的思考力を伸長させ、芸術的感性を高めるとともに表現力を身につける。

（４）自己形成を促す教育

基本的な生活習慣を身につけ時と場合に応じて臨機応変な対応ができるよう国際的に共通するマナーを身につけ、探求心、開拓心、挑戦することのできる心を養い生涯学習への意欲を高める。

（５）社会貢献への態度を育成する教育

学校生活の中でよい共同体を築いていく上での協力の精神と日本の文化を学びつつ、グローバルな視点で世界に目を向け、民族、国籍、宗教を越えて、弱い人、困難な状況にある人への共感と各自の使命に目覚め、奉仕への開花していくよう促す。

３．目指す教師像

教員の意識向上、及び組織の健全化を図るためにモチベーション・マネジメント制度を導入することにした。モチベーション・マネージメント制度は、学校目標を各学年・各分掌にブレイクダウンし、さらに各々の教員がそれに沿って目標を設定する。これによって、個人の目標と学校目標が連動し、学校目標が効率よく達成されることを目指したものである。年度始めに、所属するリーダーと目標設定を行い、中間フォロー、学年末の振り返り等を実施し、各リーダーのもと、目標達成を目指すために個々が PDCA サイクルを回す。また、キャリアパスと各段階での役割を明確にすることで、組織の健全化を図る。このモチベーション・マネジメント制度の設計にあたり、まずは、「目指す教師像」を明文化し、それをもとに議論を進めた。以下に本校の目指す教師像を示す。

キリストに信頼し、愛の実践に生きる教師

〈生徒に対して〉

・生徒の無限の可能性を信じ、成功と失敗を通して成長を支える教師
・コミュニケーションを十分にとって信頼される教師
・温かさを持って、場面に応じて厳しく指導できる教師

〈チーム（組織・同僚）に対して〉

・学校の目標に向かって率先して行動し、協働する教師
・敬意、感謝、信頼をもって、お互いに言うべきことは言い合う教師
・コミュニケーションを十分にとって助け合う教師

〈自身に対して〉

・専門分野に精通し、授業力、指導力を高め続ける教師
・向上心を持って新しいことに挑戦しながら、振り返り、改善できる教師
・社会とつながり、広い視野をもち、新しい教育を追究する教師
・常に心が健やかな教師

４．教育コンセプト

建学の精神、教育理念、教育方針、教育目標と、現代・これからを生きる生徒に必要な力を考え、以下の通り、教育コンセプトを設定する。

知識と技能を反復によって定着させた上で、現代を生きるために必要な**〈学ぶ力〉〈心〉〈姿勢〉**を育成する。

〈学ぶ力〉Academic skills

探究力・学び続ける力・コミュニケーション力の３つの「学ぶ力」を育成する。

〈心〉Mind

違いを受け入れ、かけがえのない存在であることを認め合う「心」を育成する。

〈姿勢〉Attitude

先を見据える「姿勢」、自分の考えや行動を省み改善する「姿勢」を育成する。

５．2019 年度（令和元年度）学校目標

建学の精神の具現化を目指し、本校の教育目標の達成と学院の発展を図るために、次の内容を重点目標に掲げた。

（１）目指す教師像の実現
（２）教育コンセプトの実現
（３）ICT の活用充実
（４）コース毎の学習習慣の改善・成績向上・進路実績向上
（５）大学入試改革及び次期指導要領（中１対象）の対策・研究
（６）入学者数の増員

2019 年度　学校目標と具体的方策及び評価指標

	評価項目	具体的方策	方策の評価指標
（1）	目指す教師像の実現	① モチベーション・マネージメント制度により意識向上を図る。 ② 職員協議会において確認・振り返りを行う。 ③ 職員室内掲示より意識向上を図る。	年度中間と期末に教員が自己評価を行い、期末に各項目の評価向上が教員全体の 70%以上
（2）	教育コンセプトの実現	① 学校案内パンフレット・ホームページを通して明確に打ち出す。 ② 日々の SHR、学年集会、全体集会、保護者会を通して浸透を図る。 ③ 各学年が独自に浸透を図る。どのような方策を行うか・行なっているかを全体で共有する。	・年度中間と期末に教員による自己評価を行い、各項目の評価向上が教員全体の 70%以上 ・年度中間と期末に生徒による自己評価を行い、各項目の評価向上が生徒全体の 70%以上 ・保護者による学校評価アンケート該当項目 70%以上
（3）	ICT の活用充実	①iPad を５教科(英国数理社)教員に２台ずつ配当し、iPad を使った授業を実践し、研究または公開授業を行う。	・教員による学校評価アンケート該当項目 70%以上 ・高２・高１・中１の保護者による学校評価アンケート該当項目 50%以上 ・高１・中１生徒によるアンケート実施 50%以上
（4）	各コース毎の学習習慣の改善・成績向上・進路実績向上	①学習習慣について Classi アンケートにて到達度自己評価を行うことで意識向上を図る。	年度中間と期末に生徒による自己評価を行い、各項目の評価向上が生徒全体の 70%以上
		②英検・GTEC スコア・漢検の各学年における指標を示し、生徒が率先して学習に取り組む姿勢をサポートする。	英検 中 1)4 級 80%　中 2)3 級 50% 中 3)文理Ⅰ3 級 80%　文理Ⅱ3 級 50% 高 1)文理系準 2 級 50%　その他 3 級 100% 高２)文理系準 2 級 100%　その他準 2 級 50% 高３)文理系 2 級 80%　その他準 2 級 80% GTEC スコア平均を各学年 40 以上上昇させる 漢検 中１)4 級 100%　中 2)3 級 50% 中 3)文理Ⅰ準 2 級 80%　文理Ⅱ3 級 80% 高１)文理系準２級 50%　その他 3 級 100% 高２)文理系２級 50%　その他準２級 80% 高３)文理系２級 80%　その他準２級 100%
		③現状より一歩上を目指した進路を実現するための学習指導と進路指導を担任と教科担当者が密に連携して実現する。	大学進学者(率) 国公立大）昨年以上の合格者数 7 名 関関同立）学年の 10%以上の進学者 産近甲龍・三女子大以上）学年の 30%以上
（5）	大学入試改革及び次期指導要領（中１対象）の対策・研究	各教科による研究発表会または報告会を行う。	・教員による学校評価アンケート該当項目 70%以上 ・保護者による学校評価アンケート該当項目 70%以上
（6）	入学者数の増員	①本校の魅力を整理し、各種説明会、入試関連行事等でアピールを行う。 ②高校の入試基準や中高の奨学生制度を改変する。 ③塾まわり、中学校まわりの改善 ④各種イベント、広報活動の改善	入学者数 中学）４０名以上 高校）１７０名以上

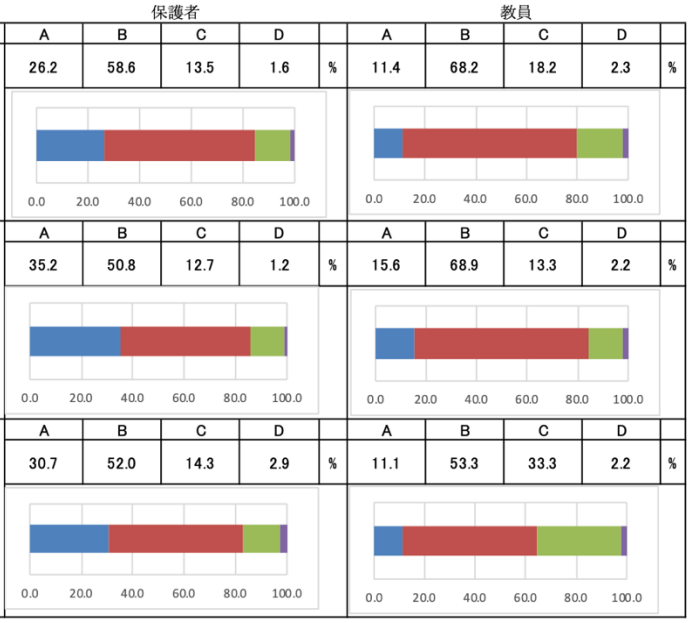
６．2019 年度（令和元年度）学校評価アンケートと結果分析

アンケートは、７分野２５項目について行なった。結果と分析は以下の通りである。今回の分析は、A（よくあてはまる）を＋2、B（ややあてはまる）を＋1、C（あまりあてはまらない）を−１、D（まったくあてはまらない）を−2 として、各評価 A〜D の割合に乗じたものを下段にスコアとして示した。スコア 0.8 以上のものを良好と考え、それ以下のものを要検討事項と考えた。また、教員と保護者との認識のズレが大きい項目に関しては、次のように印をつけている。「保護者の方が教員よりもスコアが 0.3 以上大きい場合は〇、教員の方が保護者よりもスコアが 0.3 以上大きい場合は●」

A：信愛教育・教育コンセプトについて

A:よくあてはまる　B:ややあてはまる　C:あまりあてはまらない　D:まったくあてはまらない

評価項目			保護者 A	保護者 B	保護者 C	保護者 D		教員 A	教員 B	教員 C	教員 D	
A:信愛教育・教育コンセプトについて	1	〈学ぶ力〉 探究力・学び続ける力・コミュニケーション力の3つの「学ぶ力」が育成されている	26.2	58.6	13.5	1.6	%	11.4	68.2	18.2	2.3	%
	2	〈心〉 違いを受け入れ、かけがえのない存在であることを認め合う「心」が育成されている。	35.2	50.8	12.7	1.2	%	15.6	68.9	13.3	2.2	%
	3	〈姿勢〉 先を見据える「姿勢」、自分の考えや行動を省み改善する「姿勢」が育成されている。	30.7	52.0	14.3	2.9	%	11.1	53.3	33.3	2.2	%



＜１＞〜＜３＞

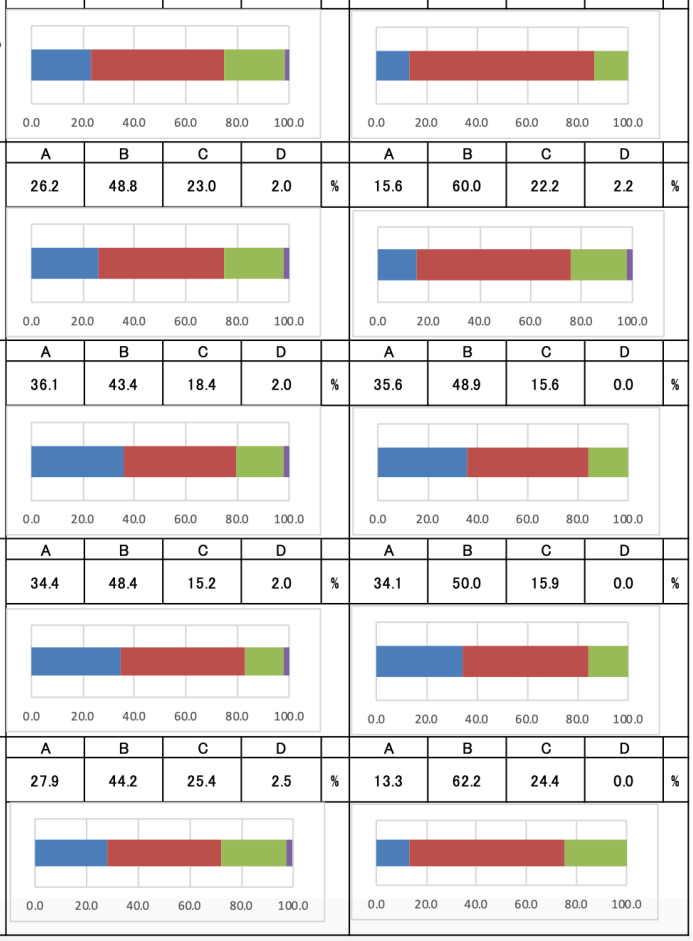
項目番号	保護者 A	保護者 B	保護者 C	保護者 D	保護者 スコア	教員 A	教員 B	教員 C	教員 D	教員 スコア	教員と保護者の認識差
1	26.2	58.6	13.5	1.6	**0.94**	11.4	68.2	18.2	2.3	**0.68**	
2	35.2	50.8	12.7	1.2	**1.06**	15.6	68.9	13.3	2.2	**0.82**	
3	30.7	52.0	14.3	2.9	**0.93**	11.1	53.3	33.3	2.2	**0.38**	〇

３項目とも保護者においては良好な結果が得られていると考えることができる。ただし、項目＜３＞の「姿勢」については、保護者に比べて教員のスコアが 0.3 以上と低く、保護者の捉え方とも大きなずれが生じている。教員ならでは不十分であると気付く具体的な教育内容を把握し、改善することが必要がある。

B：教科指導について

A:よくあてはまる　B:ややあてはまる　C:あまりあてはまらない　D:まったくあてはまらない

			保護者 A	保護者 B	保護者 C	保護者 D		教員 A	教員 B	教員 C	教員 D	
B:教科指導について	4	必要な学力が定着、向上する授業が行われている	23.4	51.6	23.4	1.6	%	13.3	73.3	13.3	0.0	%
	5	必要な学力が定着、向上する適切なコースやカリキュラムが設定されている	26.2	48.8	23.0	2.0	%	15.6	60.0	22.2	2.2	%
	6	放課後や長期休業中に、講座や補習が必要に応じて行われている	36.1	43.4	18.4	2.0	%	35.6	48.9	15.6	0.0	%
	7	学校として必要な国際教育が行われている	34.4	48.4	15.2	2.0	%	34.1	50.0	15.9	0.0	%
	8	ICTを活用して学習効率を向上させる指導が行われている	27.9	44.2	25.4	2.5	%	13.3	62.2	24.4	0.0	%



＜４＞～＜８＞

項目番号	保護者 A	保護者 B	保護者 C	保護者 D	保護者 スコア	教員 A	教員 B	教員 C	教員 D	教員 スコア	教員と保護者の認識差
4	23.4	51.6	23.4	1.6	**0.72**	13.3	73.3	13.3	0.0	**0.87**	
5	26.2	48.8	23.0	2.0	**0.74**	15.6	60.0	22.2	2.2	**0.65**	
6	36.1	43.4	18.4	2.0	**0.93**	35.6	48.9	15.6	0.0	**1.05**	
7	34.4	48.4	15.2	2.0	**0.98**	34.1	50.0	15.9	0.0	**1.02**	
8	27.9	44.2	25.4	2.5	**0.70**	13.3	62.2	24.4	0.0	**0.64**	

保護者に関しては、項目＜４＞＜５＞＜８＞は要検討事項であると読み取れる。項目＜４＞＜５＞に関しては、教育の柱となる学習に関する項目であるため、授業改革のために研究授業の充実を図り、教育課程を中心としたカリキュラム・マネジメントについても早期に見直しが必要である。また、項目＜８＞についてもiPad や Chromebook の導入は段階的に行なっているが、その活用に関しては不十分であると見ることができる。

教員においては、項目＜４＞＜５＞＜８＞のうち、＜５＞＜８＞は保護者と同様のことが言える。項目＜４＞に関しては、スコアの差が 0.3 を超えないが、教員の方がスコアが高く出てしまっていることに留意したい。

C：教科外活動について

A：よくあてはまる　B：ややあてはまる　C：あまりあてはまらない　D：まったくあてはまらない

			保護者 A	保護者 B	保護者 C	保護者 D		教員 A	教員 B	教員 C	教員 D	
C：教科外活動について	9	部活動や生徒会活動が活発に行われている	49.4	45.7	4.5	0.4	%	65.2	32.6	2.2	0.0	%
	10	学校行事が充実している	44.4	47.3	7.4	0.8	%	48.9	48.9	2.2	0.0	%
	11	学内外の活動を通して、ボランティア精神を育む教育が行われている	42.0	45.3	11.9	0.8	%	24.4	68.9	6.7	0.0	%

＜９＞～＜１１＞

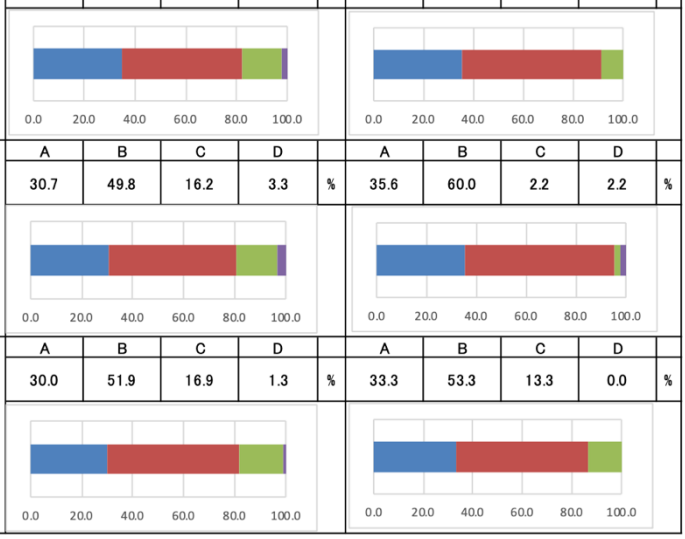
項目番号	保護者 A	保護者 B	保護者 C	保護者 D	保護者 スコア	教員 A	教員 B	教員 C	教員 D	教員 スコア	教員と保護者の認識差
9	49.4	45.7	4.5	0.4	**1.39**	65.2	32.6	2.2	0.0	**1.61**	
10	44.4	47.3	4.5	0.4	**1.31**	48.9	48.9	2.2	0.0	**1.45**	
11	42.0	45.3	11.9	0.8	**1.16**	24.4	68.9	6.7	0.0	**1.11**	

３項目とも、保護者、教員共に良好な結果であると考えることができる。今後も高水準を保持できるように努めたい。

D：進路指導について

A:よくあてはまる　B:ややあてはまる　C:あまりあてはまらない　D:まったくあてはまらない

			保護者 A	保護者 B	保護者 C	保護者 D		教員 A	教員 B	教員 C	教員 D	
D:進路指導について	12	生徒の希望に沿った進路指導が行われている	35.0	47.5	15.4	2.1	%	35.6	55.6	8.9	0.0	%
	13	進路説明会や進路プログラム、キャリア教育等が、生徒が将来を考えることのできる内容になっている	30.7	49.8	16.2	3.3	%	35.6	60.0	2.2	2.2	%
	14	2020年大学入試改革に向けた取り組み（英語四技能・ポートフォリオ等）が行われている	30.0	51.9	16.9	1.3	%	33.3	53.3	13.3	0.0	%



＜１２＞～＜１４＞

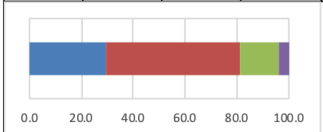
項目番号	保護者 A	保護者 B	保護者 C	保護者 D	保護者 スコア	教員 A	教員 B	教員 C	教員 D	教員 スコア	教員と保護者の認識差
12	35.0	47.5	15.4	2.1	**0.98**	35.6	55.6	8.9	0.0	**1.18**	
13	30.7	49.8	16.2	3.3	**0.88**	35.6	60.0	2.2	2.2	**1.25**	●
14	30.0	51.9	16.9	1.3	**0.92**	33.3	53.3	13.3	0.0	**1.07**	

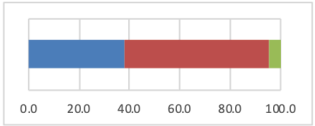
３項目とも、保護者、教員共に良好な結果であると考えることができる。ただし、３項目とも、教員のスコアの方が保護者のスコアより上まっており、特に項目＜１３＞に関しては、0.3 以上教員のスコアが高くなっているため、進路説明会、進路プログラム、キャリア教育に関しては教員が思っているほどの評価は得られていないことを再認識し、更に良いものにするためにも見直しが必要であると考える。

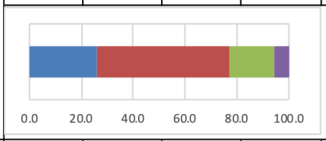
E：生徒指導について

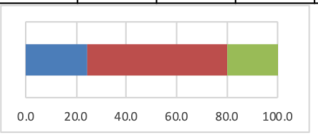
A:よくあてはまる　B:ややあてはまる　C:あまりあてはまらない　D:まったくあてはまらない

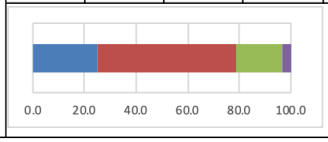
			保護者 A	保護者 B	保護者 C	保護者 D		教員 A	教員 B	教員 C	教員 D	
E:生徒指導について	15	教員の生徒指導や生徒への関わりが適切に行われている	29.8	51.7	14.9	3.7	%	37.8	57.8	4.4	0.0	%
	16	校内におけるいじめの早期発見、防止が適切に行われている	25.9	51.5	17.2	5.4	%	24.4	55.6	20.0	0.0	%
	17	生徒一人ひとりに対し、必要に応じて適切な支援が行われている	25.2	53.3	18.2	3.3	%	24.4	62.2	13.3	0.0	%

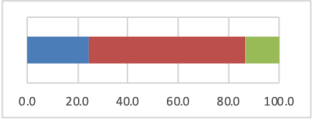












＜１５＞～＜１７＞

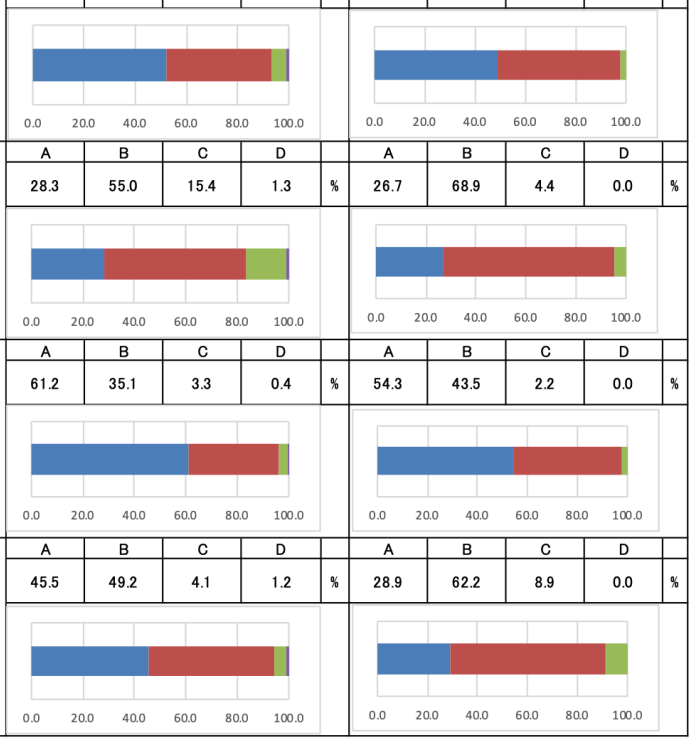
項目番号	保護者 A	保護者 B	保護者 C	保護者 D	保護者 スコア	教員 A	教員 B	教員 C	教員 D	教員 スコア	教員と保護者の認識差
15	29.8	51.7	14.9	3.7	**0.89**	37.8	57.8	4.4	0.0	**1.29**	●
16	25.9	51.5	17.2	5.4	**0.75**	24.4	55.6	20.0	0.0	**0.84**	
17	25.2	53.3	18.2	3.3	**0.79**	24.4	62.2	13.3	0.0	**0.98**	

保護者に関しては、項目＜１６＞＜１７＞が要検討事項であると考える。また、項目＜１５＞は保護者のスコアとしては良好であるが、教員との認識の違いが大きい（教員のスコアの方が高い）ことは留意しなければならない。また、教員に関しては全ての項目においてスコアが 0.8 を超えて良好であることからも、保護者、生徒目線に立った生徒指導全般の見直しが必要であると考える。生徒指導部、及びカトリック・人権教育推進部を中心に、早急な改善策の立案と、実行が求められる。

F：保護者と学校との連携について

A:よくあてはまる　B:ややあてはまる　C:あまりあてはまらない　D:まったくあてはまらない

			保護者 A	保護者 B	保護者 C	保護者 D		教員 A	教員 B	教員 C	教員 D	
F:保護者と学校との連携について	18	各種行事の案内が適宜行われている	52.1	41.3	5.8	0.8	%	48.9	48.9	2.2	0.0	%
	19	学校のホームページが充実している	28.3	55.0	15.4	1.3	%	26.7	68.9	4.4	0.0	%
	20	Classiを使用した連絡が、適切に運用されている	61.2	35.1	3.3	0.4	%	54.3	43.5	2.2	0.0	%
	21	保護者説明会・個人懇談の内容、回数が適切である	45.5	49.2	4.1	1.2	%	28.9	62.2	8.9	0.0	%



＜１８＞～＜２１＞

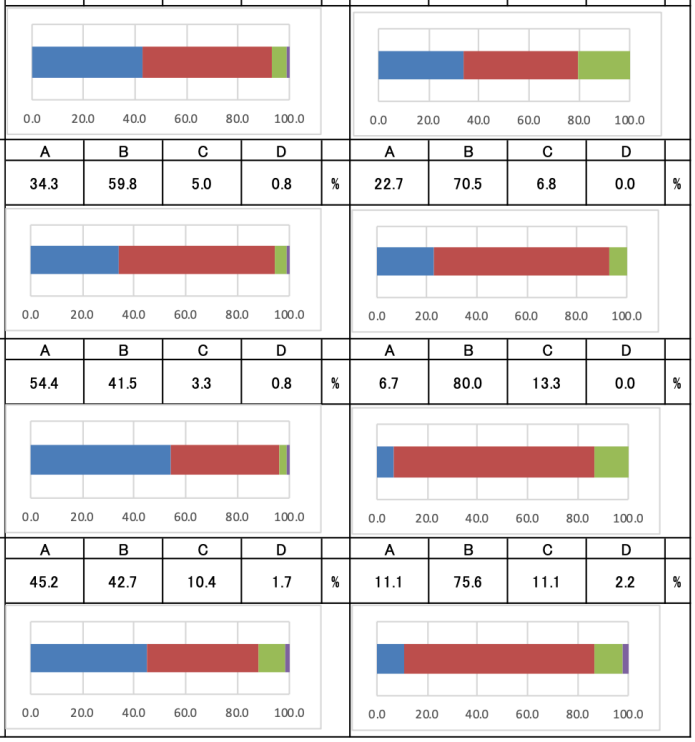
項目番号	保護者 A	保護者 B	保護者 C	保護者 D	保護者 スコア	教員 A	教員 B	教員 C	教員 D	教員 スコア	教員と保護者の認識差
18	52.1	41.3	5.8	0.8	**1.38**	48.9	48.9	2.2	0.0	**1.45**	
19	28.3	55.0	15.4	1.3	**0.94**	26.7	68.9	4.4	0.0	**1.18**	
20	61.2	35.1	3.3	0.4	**1.53**	54.3	43.5	2.2	0.0	**1.50**	
21	45.5	49.2	4.1	1.2	**1.34**	28.9	62.2	8.9	0.0	**1.11**	

４項目とも、保護者、教員共に良好な結果であると考えることができる。ただし、項目＜１９＞に関しては、保護者に比べて教員の方がスコアが 0.3 に届かないまでも 0.24 と高く保護者目線での改善が求められる。特に、今年度はホームページを刷新しているため、自己満足に終わらないように留意したい。

G：学校運営：開かれた学校づくり

A:よくあてはまる　B:ややあてはまる　C:あまりあてはまらない　D:まったくあてはまらない

			保護者 A	保護者 B	保護者 C	保護者 D		教員 A	教員 B	教員 C	教員 D	
G:施設設備について、全般	22	学校内の施設や設備が適切に運用されている	43.2	50.2	5.8	0.8	%	34.1	45.5	20.5	0.0	%
	23	避難訓練等、学校の日常の危機管理対策が適切である	34.3	59.8	5.0	0.8	%	22.7	70.5	6.8	0.0	%
	24	電話や受付での応対が適切である	54.4	41.5	3.3	0.8	%	6.7	80.0	13.3	0.0	%
	25	信愛学院の教育に満足している	45.2	42.7	10.4	1.7	%	11.1	75.6	11.1	2.2	%



＜２２＞～＜２５＞

項目番号	保護者 A	保護者 B	保護者 C	保護者 D	保護者 スコア	教員 A	教員 B	教員 C	教員 D	教員 スコア	教員と保護者の認識差
22	43.2	50.2	5.8	0.8	**1.29**	34.1	45.5	20.5	0.0	**0.93**	○
23	34.3	59.8	5.0	0.8	**1.22**	22.7	70.5	6.8	0.0	**1.09**	
24	54.4	41.5	3.3	0.8	**1.45**	6.7	80.0	13.3	0.0	**0.80**	○
25	45.2	42.7	10.4	1.7	**1.19**	11.1	75.6	11.1	2.2	**0.82**	○

４項目とも、保護者、教員ともに良好な結果であると考えられる。しかし、項目＜２２＞＜２４＞＜２５＞は保護者に比べて教員のスコアが 0.3 以上低く、教員だからこそ気付く内部の不十分さがあると推察できる。その具体的な内容を把握と改善が必要であると考える。

７．2019 年度（令和元年度）生徒授業評価アンケートと結果分析

アンケートの評価観点は 10 項目で、生徒が受講している全教科・全科目を対象に実施した。生徒たちの集中力を考慮して、項目が多くなりすぎないように心がけている。また、アンケートの結果は、全教員に配布し、以後の教育活動に活かすよう努めている。結果に関しては、全体、中学校、高等学校に分けてまとめた。

今回の分析は、A（よくあてはまる）を＋2、B（ややあてはまる）を＋1、C（あまりあてはまらない）を−１、D（まったくあてはまらない）を−2 として、各評価 A～D の割合に乗じたものを下欄にスコアとして示した。スコア 0.8 以上のものを良好と考え、それ以下のものを要検討事項と考えた。また、中学校と高校とのスコア差が 0.2 以上ズレが大きい項目に関しては、●印をつけている。

授業評価アンケート　結果＜2019 年 12 月実施分＞　全体・中学校・高等学校

全体

		A	B	C	D	2019年度 A+B	2018年度 A+B	2017年度 A+B
1	授業の開始・終了の時間が守られている	76.6%	16.3%	4.8%	2.2%	92.9%	92.0%	91.5%
2	先生の熱意が感じられる	64.5%	26.7%	6.6%	2.3%	91.1%	90.6%	89.2%
3	話し方がハッキリしてわかりやすい	64.0%	23.8%	8.9%	3.3%	87.8%	87.3%	85.7%
4	板書がハッキリしてわかりやすい	59.2%	25.1%	10.5%	5.2%	84.2%	84.3%	82.9%
5	その日の授業で何が重要なのかがわかる	50.3%	31.7%	13.4%	4.5%	82.1%	83.3%	81.2%
6	この先生の授業を受けると力がつく	49.2%	33.0%	13.5%	4.3%	82.1%	83.3%	81.5%
7	授業に集中できる	55.5%	29.7%	11.0%	3.9%	85.1%	86.0%	84.8%
8	この教科・科目の予習・復習の仕方がわかる	41.8%	30.6%	18.2%	9.4%	72.4%	75.9%	71.3%
9	よくほめられる、励まされる。 また、適切な注意指導もある。	49.0%	31.3%	14.0%	5.6%	80.4%	83.3%	80.2%
10	この先生の指導に満足している	57.0%	29.7%	9.1%	4.2%	86.7%	87.4%	86.3%

A：よくあてはまる　B：ややあてはまる　C:あまりあてはまらない　D：まったくあてはまらない

中学校

		A	B	C	D	2019中間 A+B	2018中間 A+B	2017年度 A+B
1	授業の開始・終了の時間が守られている	74.2%	19.3%	5.8%	0.8%	93.4%	88.3%	92.6%
2	先生の熱意が感じられる	58.4%	28.9%	10.0%	2.7%	87.3%	83.1%	87.7%
3	話し方がハッキリしてわかりやすい	61.7%	25.2%	10.7%	2.4%	86.9%	80.4%	87.3%
4	板書がハッキリしてわかりやすい	56.7%	27.0%	11.6%	4.7%	83.7%	78.3%	84.2%
5	その日の授業で何が重要なのかがわかる	40.8%	34.1%	20.3%	4.8%	74.9%	70.9%	77.8%
6	この先生の授業を受けると力がつく	42.8%	32.1%	21.4%	3.7%	74.9%	72.3%	79.2%
7	授業に集中できる	45.4%	31.0%	19.5%	4.1%	76.5%	75.3%	83.0%
8	この教科・科目の予習・復習の仕方がわかる	34.0%	30.9%	24.4%	10.7%	64.9%	62.0%	66.8%
9	よくほめられる、励まされる。 また、適切な注意指導もある。	43.5%	34.3%	16.9%	5.3%	77.8%	73.6%	75.7%
10	この先生の指導に満足している	52.5%	31.5%	12.6%	3.4%	84.1%	79.0%	84.8%

A：よくあてはまる　B：ややあてはまる　C:あまりあてはまらない　D：まったくあてはまらない

高校

		A	B	C	D	2019中間 A+B	2018中間 A+B	2017年度 A+B
1	授業の開始・終了の時間が守られている	77.2%	15.7%	4.6%	2.6%	92.8%	93.1%	91.0%
2	先生の熱意が感じられる	65.9%	26.2%	5.8%	2.2%	92.0%	92.7%	89.8%
3	話し方がハッキリしてわかりやすい	64.6%	23.4%	8.5%	3.6%	88.0%	89.3%	85.1%
4	板書がハッキリしてわかりやすい	59.7%	24.7%	10.3%	5.3%	84.3%	85.9%	82.3%
5	その日の授業で何が重要なのかがわかる	52.5%	31.2%	11.8%	4.5%	83.7%	86.8%	82.6%
6	この先生の授業を受けると力がつく	50.6%	33.2%	11.7%	4.5%	83.8%	86.5%	82.5%
7	授業に集中できる	57.8%	29.3%	9.0%	3.9%	87.1%	89.0%	85.5%
8	この教科・科目の予習・復習の仕方がわかる	43.5%	30.5%	16.9%	9.1%	74.0%	79.7%	73.2%
9	よくほめられる、励まされる。 また、適切な注意指導もある。	50.3%	30.7%	13.3%	5.7%	81.0%	86.1%	82.0%
10	この先生の指導に満足している	58.0%	29.3%	8.3%	4.4%	87.3%	89.8%	87.0%

A：よくあてはまる　B：ややあてはまる　C:あまりあてはまらない　D：まったくあてはまらない

＜１＞～＜１０＞

項目番号	全体					中学校					高等学校					中学と高校のスコア差
	A	B	C	D	スコア	A	B	C	D	スコア	A	B	C	D	スコア	
1	76.6	16.3	4.8	2.2	**1.60**	74.2	19.3	5.8	0.8	**1.60**	77.2	15.7	4.6	2.6	**1.60**	
2	64.5	26.7	6.6	2.3	**1.45**	58.4	28.9	10.0	2.7	**1.30**	65.9	26.2	5.8	2.2	**1.48**	
3	64.0	23.8	8.9	3.3	**1.36**	61.7	25.2	10.7	2.4	**1.33**	64.6	23.4	8.5	3.6	**1.37**	
4	59.2	25.1	10.5	5.2	**1.23**	56.7	27.0	11.6	4.7	**1.19**	59.7	24.7	10.3	5.3	**1.23**	
5	50.3	31.7	13.4	4.5	**1.10**	40.8	34.1	20.3	4.8	**0.86**	52.5	31.2	11.8	4.5	**1.15**	●
6	49.2	33.0	13.5	4.3	**1.09**	42.8	32.1	21.4	3.7	**0.89**	50.6	33.2	11.7	4.5	**1.14**	●
7	55.5	29.7	11.0	3.9	**1.22**	45.4	31.0	19.5	4.1	**0.94**	57.8	29.3	9.0	3.9	**1.28**	●
8	41.8	30.6	18.2	9.4	**0.77**	34.0	30.9	24.4	10.7	**0.53**	43.5	30.5	16.9	9.1	**0.82**	●
9	49.0	31.3	14.0	5.6	**1.04**	43.5	34.3	16.9	5.3	**0.94**	50.3	30.7	13.3	5.7	**1.07**	
10	57.0	29.7	9.1	4.2	**1.26**	52.5	31.5	12.6	3.4	**1.17**	58.0	29.3	8.3	4.4	**1.28**	

全体的に良好な結果が見られるが、項目＜８＞に関しては要検討事項である（高校ではスコア 0.82 と基準の 0.8 を上回ってはいるものの高いスコアではない)。教科の特性もあるかもしれないが、予習や復習の重要性や、具体的な実施方法を生徒に示す必要がある。

また、項目＜５＞＜６＞＜７＞＜８＞に関しては、他の項目に比べて中学と高校のスコア差がかなり大きく、中学生と高校生の特性の差が出ているように思われる。それぞれの発達段階に応じた学習指導の見直しが必要であると考える。

８．2019 年度（令和元年度）　自己評価及び次年度の課題と改善策

評価項目（１）目指す教師像の実現	自己評価
具体的方策①　モチベーション・マネージメント制度により意識向上を図る。 ＜活動実績と自己評価＞ モチベーション・マネージメント制度導入初年度であった。予定通りに目標設定、中間フォロー、年度末の振り返りを面談を通して実施することができた。評価指標としていた各項目の評価が向上した教員の割合は 33%~57%にとどまり、目標としていた 70%に達することができなかった。 ＜次年度の課題と改善策＞ 評価指標の妥当性の観点から、年度中間に比べて年度末の状態を分かりやすく評価できるように自己評価アンケートの内容を改善する。また、モチベーション・マネージメント制度は振り返りを行った上で、運用面の改善を図る。	C
具体的方策②　職員協議会において確認・振り返りを行う。 ＜活動実績と自己評価＞ 各学期始めの職員協議会において、「目指す教師像」の読み合わせを行い、意識向上に努めた。上記具体的方策①と同様に、目標値を達成することはできなかったが、具体的方策は遂行できた。 ＜次年度の課題と改善策＞ 引き続き、機会を作って「目指す教師像」の意識付けは行っていく。また、読み合わせにとどまらず、教員研修などを通して目指す教師像の実現を図る。	自己評価 B
具体的方策③　職員室内掲示より意識向上を図る。 ＜活動実績と自己評価＞ 予定通り、職員室内の掲示も行っている。上記具体的方策①と同様に、目標値を達成することはできなかっが、具体的方策は遂行できた。 ＜次年度の課題と改善策＞ 具体的方策②の改善策でも記載した通り、教員研修などを通して目指す教師像の実現を図る。	自己評価 B

評価項目（２）教育コンセプトの実現	自己評価
具体的方策①　学校案内パンフレット・ホームページを通して明確に打ち出す。 ＜活動実績と自己評価＞ 予定通り、パンフレットやホームページを通して、教育コンセプトを明確に打ち出した。評価指標としていた各項目の評価が向上した教員の割合は 42%~50%、生徒の割合は 35%~40%にとどまり、目標としていた 70%に達することができなかった。保護者においては指標を評価向上ではなく、該当項目の満足度としており、「よくあてはまる・ややあてはまるの割合」82.7%~84.8%と高水準であった。 ＜次年度の課題と改善策＞ 評価指標の妥当性の観点から、教員と生徒においては、年度中間に比べて年度末の状態を分かりやすく評価できるように自己評価アンケートの内容を改善する。また、引き続き、パンフレットやホームページを通して、教育コンセプトの更なる浸透を図る。	B
具体的方策②　日々の SHR、学年集会、全体集会、保護者会を通して浸透を図る。 ＜活動実績と自己評価＞ 日々のＳＨＲ、学年集会においては各学年の方法で浸透を図った。全体集会や保護者会では、教頭等から発信をを行った。評価指標については、上記具体的方策①と同様に、教員と生徒に関しては達成することができなかったが、保護者に関しては高水準であった。 ＜次年度の課題と改善策＞ 各機会において教育コンセプトの浸透を図るだけではなく、各行事とも結びつけ、振り返りを実施することで、教育コンセプトの実現に努める。また、上記具体的方策①と同様に、実績と評価の妥当性を向上させるために自己評価アンケートの内容も改善する。	自己評価 B
具体的方策③　各学年が独自に浸透を図る。どのような方策を行うか･行っているかを全体で共有する。 ＜活動実績と自己評価＞ 各学年でどのように教育コンセプトを生徒に浸透させているか、全体で共有する機会を作ることができなかった。評価指標については、上記具体的方策①と同様に、教員と生徒に関しては達成することができなかったが、保護者に関しては高水準であった。 ＜次年度の課題と改善策＞ 上記具体的方策②で記載したように、各行事と結び付けて振り返りを行うため、その振り返りを全体で共有する。	自己評価 C

評価項目（３）ICT の活用充実	自己評価
具体的方策①　iPad を５教科(英国数理社)教員に２台ずつ配当し、iPad を使った授業を実践し、研究または公開授業を行う。 ＜活動実績と自己評価＞ 高１と中１の５教科担当者を中心に iPad を配布し、１月に校内研究授業、２月に校外に対しても公開研究授業を実施した。教員による評価は該当項目の「よくあてはまる・ややあてはまるの割合」75.5%と目標としていた 70%を達成することができた。保護者に関しても 76.7%と目標としていた 50%を大幅に超えることができた。生徒に関しては「ICT を十分に学習に活用でき学力向上につながっている・ICT をかなり学習に活用できている・ICT をある程度学習に活用できているの割合」58%と目標としていた 50%を達成することができた。 ＜次年度の課題と改善策＞ iPad を配布する教員を増やし、更に ICT 教育を充実させる。また、高３生は Chromebook を導入しているため、iPad と Chromebook の利用促進を図る。尚、p6 でも述べた通り、ＩＣＴの活用に関しては、今後も要検討事項であることは留意したい。	A

評価項目（４）各コース毎の学習習慣の改善・成績向上・進路実績向上	自己評価
具体的方策①　学習習慣についてClassiアンケートにて到達度自己評価を行うことで意識向上を図る。 ＜活動実績と自己評価＞ 予定通り年度中間（１１月）と年度末（２月）に学習習慣についての自己評価アンケートを行い、学習に対する意識向上を図った。結果は、中間より学年末に学習習慣が向上した生徒は 22%、現状維持が 81%であった。目標としていた学習習慣が向上した生徒の割合 70%を達成することはできなかったが、現状維持の生徒の努力を加味して評価した。 ＜次年度の課題と改善策＞ 評価指標の妥当性の観点から、年度中間に比べて年度末の状態を分かりやすく評価できるように自己評価アンケートの内容を改善する。また、現状を共有し、学習習慣の改善策を検討し、実施する。	B
具体的方策②　英検・GTEC スコア・漢検の各学年における指標を示し、生徒が率先して学習に取り組む姿勢をサポートする。 ＜活動実績と自己評価＞ 各学年における英検・GTEC スコア・漢検の指標を示し、英語科と国語科を中心に、生徒の学力向上にサポートに努めた。 英検に関しては、中１と中２に関してはほぼ目標を達成し、中３～高３に関しては、コースで目標達成度合いに差が出てしまった。中３は文理Ｉ、高校は文理Ｓ・文理コースにおいては目標を達成できたが、それ以外のコースでの目標が達成できなかった。GTEC に関しては、４技能トータルスコアにおいて高２　72.8、高３　88.4 上昇し、高水準であった。 漢検に関しては、中１は４級が約 40%、中２は約 21%などと指標から大きく離れている。中３以降はコースによって目標を達成または目標近くまで合格者が出ているものもあるが、全体として指標を下回っているものがほとんどである。これは、６月受験のために学習内容習得までの期間が短いこと、漢検学習の提出物指導が徹底できていないなどの要因が大きい。 ＜次年度の課題と改善策＞ 各教科において、今年度の評価指標の妥当性を検討するとともに、現状に合わせた目標設定を再度試みる。また、目標達成に向けて各教科と学年が協力して、指導方法を見直しながらＰＤＣＡサイクルを確立する。	自己評価 B
具体的方策③　現状より一歩上を目指した進路を実現するための学習指導と進路指導を担任と教科担当者が密に連携して実現する。 ＜活動実績と自己評価＞ 「国公立大」昨年以上の合格者数として７名を目標としていたが、目標達成は４名、コース全体の２５％であった。「関関同立」学年の 10%以上の進学者を目標としていたが、結果としては 7.1%（在籍者数 126 名中 9 名）であった。「産近甲龍・三女子大以上」学年の 30%以上の進学者を目標としていたが、結果としては 23.8%（在籍者数 126 名中 30 名）であった。全体的な見方をすると、一人当たりの受験する数が減ったことが前述の結果につながった１つの要因と考えられる。 ＜次年度の課題と改善策＞ 現状より一歩上を目指した進路を実現するために、学習指導と進路指導を受験戦略に位置付けて、進路指導部を中心に、学年と教科担当者が情報交換を密に行えるような体制を整える。	自己評価 C

評価項目（５）大学入試改革及び次期指導要領（中１対象）の対策・研究	自己評価
具体的方策　各教科による研究発表会または報告会を行う。 ＜活動実績と自己評価＞ 各教科、各学年で研究を行い、生徒保護者への発信を行った。教員による評価は該当項目の「よくあてはまる・ややあてはまるの割合」86.6%、保護者による評価は 81.9%と、いずれも目標としていた 70%を達成することができた。 ＜次年度の課題と改善策＞ 次期学習指導要領の検討・立案のために委員会を設置し、具体的に教育課程を立案する。また、研究発表会や報告会の実施に関して課題が残っていることは留意したい。	A

評価項目（６）入学者数の増員	自己評価
具体的方策①　本校の魅力を整理し、各種説明会、入試関連行事等でアピールを行う。 ＜活動実績と自己評価＞ 教育コンセプトを明文化を筆頭に、本校の魅力を整理してアピールを行ったが、入学者数は中学１８名、高校１２９名と目標としていた中学４０名、高校１７０名を大幅に下回ってしまった。中学は在校生の少なさが、更に入学者や受験者数を減らすという負の連鎖になってしまっていること、高校は内部進学生の減少と文理コースの志願者、特に併願生の減少が影響していると考えている。 ＜次年度の課題と改善策＞ 入試説明会参加者のおよそ７０％が受験につながっていることを考えると、まずはオープンキャンパスや、各種説明会、広告媒体を通じて入試説明会の集客を上げ、本校の魅力をしっかりとアピールする必要がある。	C
具体的方策②　高校の入試基準や中高の奨学生制度を改変する。 ＜活動実績と自己評価＞ 高校の入試基準、及び中高の部活動奨学生制度、中学の学業成績による奨学生制度を改変した。高校の入試基準に関しては、現状のニーズより低い設定になったという認識が一部の中学校や塾にあることを渉外担当者から聞いている。部活動奨学生は、入学者に対する割合が増加しているため、ある一定の効果があったと考えている。中学の学業成績による奨学生制度に関しては、奨学生の割合からも大きな効果が望めなかったと考えている。 ＜次年度の課題と改善策＞ 今年度の入試結果から、今回の改変の問題点を分析し、より受験生のニーズにあった制度を構築する。	自己評価 B
具体的方策③　塾まわり、中学校まわりの改善 ＜活動実績と自己評価＞ 塾まわりに関しては、教員の校務分掌に応じて配当数、実施時期を調整したが、大きな効果はなかった。中学校まわりに関しては、一部担当者が変更したこともあり、受験者数を増やすことができた学校もあった。 ＜次年度の課題と改善策＞ 塾まわり、中学校まわり共に担当者を増員する。また、入試広報部内において各渉外担当者の情報を生かせるような組織体制を構築すると同時に、新たに募集広報連絡会議を設置し、情報交換を蜜に行う。	自己評価 C
具体的方策④　各種イベント、広報活動の改善 ＜活動実績と自己評価＞ 今まで以上に、本校生徒が運営の一部を担うなどの工夫を各イベント毎に行った。また、オープンキャンパス の参加者数に関しては、近年と比べてもそれほど遜色ない数（中高ともに過去５年間で２番目に多い数値）であったが、入学者数は前述の具体的方策①に示した結果に留まった。 ＜次年度の課題と改善策＞ オープンキャンパスの内容や日程、広報媒体の見直し（ＳＮＳの利用）、ホームページの更新頻度の向上を実践する。また、ＳＮＳ投稿などで肯定的な投稿が増えるよう学校のイメージアップを図る。	自己評価 B

９．学校関係者評価

（１）学校関係者評価委員会の構成

後援会代表２名・愛友会（同窓会）代表２名　　教育会代表（高校副会長及び中学副会長）２名
中高教員代表（校長・教頭）２名　計８名

（２）開催日時

令和２年８月２９日（土）１０：００～１１：３０

（３）評価のために使用した資料

２０１９年度　学校評価報告書原案

・学校目標と具体的方策及び評価指標　　・学校評価アンケート（保護者・教員）と結果分析
・生徒授業評価アンケートと結果分析　　・自己評価及び次年度の課題と改善策
・２０２０年度教育改善ＰＤＣＡサイクルのイメージ

（４）学校関係者評価委員会のまとめ

評価項目（１）目指す教師像の実現

・引き続き、学校教育の要となる教師力の向上を図る必要がある。

評価項目（２）教育コンセプトの実現

・在校生と保護者に自校のパンフレットを配布し、教育の全体像を見せ、自分たちが目指していることを学校全体で共有することも必要である。
・現在のホームページは受験生向けに作成されているので、「在校生・保護者の皆様へ」「卒業生の皆様へ」のページも分かり易く新設し、そこから教育コンセプトや、そのコンセプトに沿った学習活動の掲載などをしていくことも検討していくべきである。

評価項目（３）ＩＣＴの活用充実

・全教室に Wi-fi を完備したが、１学期は大人数ではつながらないなどの問題があった。今はうまく動いているが、早期の解決が必要であった。今後も問題が生じれば、早急な対応が必要である。
・オンライン授業などは非常に有効であった。
・２０２１年度は全学年端末が揃うので、更なる有効活用に期待する。

評価項目（４）各コース毎の学習習慣の改善・成績向上・進路実績向上

・分母（生徒数）が少ないことは進路実績に関してデメリットになっているため、学校の知名度を上げ、生徒数を増やす努力をしなければならない。
・生徒にもよるが、受験に関して塾頼みの傾向もあり、受験指導の改善が必要である。

評価項目（５）大学入試改革及び次期学習指導要領の対策・研究

・大学入試改革について、特に２０２０年度高３は、国（文科省）の方針に振り回された。ただし、学校がその都度、丁寧に対応・情報発信してくれたので安心できた。引き続き、しっかりと対応していく必要がある。

評価項目（６）入学者の増員

・新聞などの広告に信愛が見受けられないので、そのような媒体での発信も必要と考える。
・信愛の「あたたかい」学校の雰囲気を伝えたい。
・内部小学校から他中学に進学する児童の中には、併設大学への進学を売りにしている学校へ進学した児童がいた。信愛も、連携校や指定校推薦制度をうまくアピールしても良いのではないかと思うが、学力向上との兼ね合いを検討する必要もある。
・生徒間のトラブルなどを常に早期に発見し、解決できるような安心して通える学校である必要がある。
・小さい単位の同窓会（ホームカミングデイ）などを実施し、自分の学校を振り返る機会を作り、自分たちの学校の良さが口コミで広がっていくことを期待する。

１０．２０２０ 年度の教育改善ＰＤＣＡサイクルのイメージ

２０２０ 年度（令和２年度）教育改善ＰＤＣＡサイクルのイメージ

P

1　目指す教師像の実現
2　教育コンセプトの実現
3　ICT の活用充実
4　各コース毎の学習習慣の改善・成績向上・進路実績向上
5　次期指導要領の検討・立案
6　入学者数の増員

⇩

D

1　モチベーション・マネジメント制度の振り返り・研修を実施
2　行事を含めて各教育活動に結びつけ、振り返りを実施
3　iPad・Chromebook を利用した授業及び研究授業を実施
4　英検、GTEC、漢検の級及びスコア向上のための指導を実施
5　教育課程検討委員会の設置し、具体案の検討を実施
6　各種入試関連行事、広告媒体の見直しを実施

⇩

C

1　教員に自己評価アンケートを実施する。
2　教員・生徒・保護者に自己評価アンケートを実施する。
3　教員・生徒・保護者に自己評価アンケートを実施する。
4　各教科からの分析報告を実施する。
5　教員に自己評価アンケートを実施する。
6　募集広報連絡会にて、状況・情報共有を実施する。

⇩

A

1　行動変容を実践する。
2　具体的教育内容を実践する。
3　ＩＣＴを利用した授業改革を実践する。
4　各指標達成のための指導改善を実践する。
5　具体案の見直しを実践する。
6　各種入試関連行事、広告媒体の更なる見直しを実践する。